

れるべきであると考え、妥当な年間の日数として13地区で10日以内、8地区で11～20日、6地区で21～30日をあげていた。

現状の救急救命士の病院実習に対する満足度は12地区で5段階評価の3以上であったが、2以下とする地区も12あった。

核となる医師が存在している地域は10地区、いない～わからないが21地区。

以上集計を通じ、歴然たる地域格差の存在と、法制化に対する強い希望が印象に残った。

Ⅱ. 県内5つの地区における「救急隊員の病院実習の現状と問題点」について

1 「佐渡地区における救急隊員の病院実習の現状と問題点」

(1) 救急隊員の立場から

前田 一

佐渡消防本部

佐渡地区は、現在7名の救急救命士がおりますが、来年度から高規格救急車を運用する佐渡消防本部の3名で、佐渡総合病院の岩田副院長のご配慮により、今年の4月から順次、就業前実習を行い、又、6月からは生涯実習として、救急外来にて勤務時間中に月に3回行えるようにしていただきました。

病院スタッフの皆さんは、救命士に対してどう対応すれば良いのか分からなかったようで、お互いに戸惑う事が多かったため、病院スタッフとの理解を深め、より一層の信頼関係を築くため、勉強会も行いました。

今後は、「中間報告」にもあるように、県レベルでのメディカルコントロール協議会を設立していただき、実習内容についても、基準を設けて実施するのが良いのではないかと思います。

佐渡では、高規格救急車の運用に向け、病院の理解と協力をいただき、救命士としての知識と技術の向上を図っているところですが、これまで遅れた分、早く皆様と同じレベルになりたいと思います。

(2) 病院側の立場から

岩田 文英

佐渡総合病院内科

佐渡地区の救急を担う消防署は町村の関係で四つに分かれています。人口は約7万2000人であり、65歳以上の人口割合が34%を占める地域です。以前より救急救命士の方はいたのですが、高規格救急車の配備がされていず組織立った救急隊員の病院実習もなく救急救命士の活躍の場もありませんでした。漸く平成15年度に高規格救急車が配備されることになり、当院でも今春より救急隊員の就業前病院実習の引き受けが始まったところですが、具体的なカリキュラムは以前より当院で引き受けていた新潟医療技術専門学校救急救命士科の学生の夏季実習に準じてなるべく様々なセクションでの実習や見学ができるようにくみ、気管挿管手技は気管支鏡を用いての気管挿管のトレーニングをしております。指導医師や看護師などの時間的な余裕がないなど、また婦人科や精神科関連では患者さんの同意が得られず最初から実習項目に組めないなどの制約もありスムーズに行かない点もあるのが実情です。

2 東蒲原地区における救急隊員の病院実習の現状と問題点

(1) 救急隊員の立場から

救命士 寺久保幹男

東蒲原広域消防本部

東蒲原地区は、阿賀野川沿の東部に位置し、福島県(西会津)との県境を接し、2町2村で構成され、山間過疎高齢化地域である。

病院実習は、現在は救急救命士のみが実施しており、管内では唯一の病院である県立津川病院で実施させてもらっている。

病院実習の内容は、一口で言えば看護師に就いて回る実習が主である。

問題点は、医師に就いて行う実習が少ない、救急専門医・麻酔科医及び救急医療への先進的な医師が少ない、症例が少ない、症例検討会など多くあり、一消防本部と病院だけで解決するのは、難

しい。

都道府県単位での医療協議会やMC体制づくりが必要であり、全県的な救命士や救急隊員のレベルアップを図らなくてはならない。現状のままでは、ますます救命士等のレベルの地域格差が広がってしまう。

また、病院実習受入れ病院や指示病院等への県、国からのMC体制への予算的助成とMC担当者(医師)の選任なども必要ではないのか。

(2) 病院側の立場から

助産師 宮澤美代子

県立津川病院

I. 県立津川病院の紹介

当院は東蒲原4ヶ町村の拠点病院としての機能を担っています。当院の使命と運営方針は僻地医療の充実、救急医療体制の充実、地域医療の充実です。

II. 病院実習の現状

主な研修内容は、外来診療や救急外来の見学と病棟での看護研修となっています。当内科医は外来、入院患者の診療や僻地診療、訪問診療の他、養護老人ホーム「きりん荘」や特別養護老人ホーム「東蒲の里」の委託医も務め多忙な日常にあり、医師による指導、助言体制の計画は難しい状況にあるのではないかと察されます。そこで実習期間中は病院全体の機能や業務等を知っていただくよう、放射線科、検査科、中央材料室、内視鏡室の実習も組み入れています。チャンスがあれば手術見学も可能です。病棟実習においては担当看護師とともに診療や検査の補助、看護援助や実施可能な行為は積極的に行っていただいています。スタッフ間においては新しい体験や見学が1つでもできるよう声をかけあったり、救急患者の搬送がある時は外来から連絡が入るよう連携しています。

主な看護研修の場となる病棟について紹介します。過去6ヶ月の入院患者の平均年齢は79.2歳です。80歳以上は52.5%と全体の半数を占め、75歳以上で見ますと68.1%と7割を占めています。

8月の1日平均の入院患者数、看護援助面では入院患者数54名、担送患者数25.3名、オムツ使用患者数26.3名、IVH・24h持続点滴患者数9.9名、経管栄養施行患者数11.9名、食事介助数10.4名、ネブライザー施行患者数11.3名でした。これらの数値から読み取れるように高齢で寝たきり状態に加え、経口摂取が困難な患者群が多く、呼吸器障害の疾患が多い現状にあります。このような入院患者層の背景もあり、気管挿管は年に数件と症例は少なく、また除細動器はここ数年作動していません。このような臨床現場にあって救急救命士の実習項目を満たすことは難しい実情にあると言えます。

III. 希望する検討課題

1. 実習病院として技術体験上、不十分な環境
2. 地域性からメディカルコントロールの体制づくりが急がれる
3. 産科領域における母児の安全確保

IV. おわりに

救急医療の充実には、救急隊員、救急救命士の活動が大変大きな要素を持っています。そうした皆さんと私たち医療関係者が共同することにより、立地条件や施設のハンディを越えて、地域の基本的ニーズに応えて行けるのではないのでしょうか。

3 新発田地区における救急隊員の病院実習の現状と問題点

(1) 救急隊員の立場から

救急救命士 諏訪 仁司

新発田地域広域消防本部

新発田地域広域圏は、7ヵ市町村で構成され管内人口約155,100人である。

消防本部の概要は、1本部2署1分署5出張所1分遣所、救急自動車9台、職員数165人で救急隊員の資格として救急救命士10人 I課程76人 II課程42人 標準課程31人で消防業務と兼任である。